介護実習生と介護職員の性差に関する比較調査

側　垣　順　子
富　岡　和　久

第１章　序論

１　はじめに

先ずこの研究の取り組みの基本的視座と目的について、確認しておきたい。筆者は社会福祉の援助は、関係の質がその自己実現の質や実践内容を規定する大きな要因であると考える。この関係とは、人との援助的かかわり関係つまり対人援助サービスでの関係のみならず、制度や政策と人との関係も視野に入れている。後者は、制度や政策を通して供給されるものを人が利用するという関係だけを意味するものではない。供給されるサービスや制度の内容が、人の存在や人間尊重の価値に照らされ、反映したものとなっているかという、価値との関係も意味している。詳細は別の機会とするが、たとえば介護の実践において、介護サービスの量や種類が介護を必要としている人のニーズを満足させるだけでなく、介護という働きを通した援助的かかわり関係の質がその人の満足をより規定するものとなっているということである。そしてそのような介護が実践されるような社会的・思想的環境が、どのようにサービスにおいて実現されているのかが重要となってくるのである。この意味において、今回の介護にかかわる性差の研究は、実はそれ自体に目的があるのではなく、今日の介護実践にみられる援助の質やあり様を、援助の本質から検証するものとしての意味を持っていることを、ここに示しておくことにする。

このテーマは多くの展開の可能性を持っている。これまでの社会福祉論や実践では、筆者の検索する中では、ジェンダーの視点はほとんどなかったか、あるいは担い手・労働者としての切り口が多かった。また介護労働とジェンダーは、家庭内介護の中で誰が介護者となりうるのか、性役割として女性が期待され、世代間によって継承されているのはなぜか、介護を受ける立場の身体性と介護する立場の身体性が、これからの介護の担い手としての性とどのように交差していくのかという視点からの研究がわずかにある。これらの研究課題には、生物学的な性差、「人が自己を取り巻く環境を認知する際に使用する性（ジェンダー）に関する認知的枠組み」（伊藤）である性差観やジェンダー役割固定観念、これを媒介とした態度・行動、社会的期待などが複雑に影響しあっている。これはきわめて身体接触が高く、心理的抵抗のともなうのが介護という援助であることにも起因している。

2　研究の背景

現在、毎年２万人の介護福祉士が誕生し、老人福祉施設の従事者のうち介護職総数は12万人を越えている。2002年３月末の登録者のうち男性は５万1338人であり、18.8%を占めている。また、全国老人ホーム基礎調査（５年毎調査、1997年実施2000年報告）によると男性介護者の割合は、平均12.5%（特別養護老人ホーム15.9%）であり、施設の介護職員の中で過去５年の間に男性介護者は約２～2.6倍に増加している。介護者の年齢構成については、10･20歳代が１施設の介護職員に占める比率は平均30.1%（特別養護老人ホーム45.6%）であった。

一方、老人福祉施設と介護老人保健施設での利用者の性別割合（全国老人ホーム基礎調査及び厚生労働省大臣官房統計情報部老人保健施設報告1997年）は、男性が26.1%、女性が73.9%であり、女性の施設利用者の比率が高い。平均年齢は80.5歳であった。老人福祉施設での年齢構成比のうち85歳以上が占める割合は平均32.8%（特別養護老人ホーム42.8%）であり、年々増加傾向にある。

このような利用者と介護者の年齢や性別構成比が、両者にどのような影響を及ぼしているのだろうか。利用者主体の介護の実践はどのように具体化されているのかを双方の立場から明らかにする必要がある。それよって、利用者にとって望ましい介護の提供に資することができると考えるからである。

今回は社会的サービスの中でも、施設における介護者と介護実習生の立場から調査･研究を行なった。今回の比較調査は、プレ調査としての段階であり、最終目的は、先に述べたように、利用者主体の援助の実態と課題を考察することである。その手がかりに介護者の性別と年齢を軸とした。つまり社会的サービスとしての介護にかかわる施設における介護者とこれからの介護を担う介護実習生がどのように介護を受ける側の性をうけとめ、利用者主体の介護実践を行っているのかということである。介護者が捉える利用者の性、介護内容などを中心にここに報告する。また施設の介護職員の業務への性別役割分業意識に関する基礎的データー収集も実施した。今後の関係者の研究のヒントになると期待している。

第２章　研究方法

1　調査目的

①介護者のもつ利用者に対する性差観について、その傾向を知る。

②年齢とジェンダー役割固定観念との関連から、介護者と利用者の性差観の差異を考察する。

③介護者が性差を配慮して行なっている介護の有無と種類について知る。

④介護者の業務における性別役割分業意識の傾向を知る。

①～④を通して社会福祉の理念である主体性の尊重や自己実現、利用者の権利の尊重などがどのように具体的に実践として展開しているのかをさぐり、今後の介護職養成教育に活かすこと、また今後の社会的介護におけるジェンダー役割期待の基礎資料となることを目的とする。

2 調査概要

介護実習生と施設介護職に対して意識調査を行った。

介護実習生については、実習後の振り返りアンケートを自計式・集合調査を実施した。今回は、その質問項目の中で介護職の性別が利用者に及ぼす影響の有無や介護の内容などについて回答を求めた部分を使用した。回収率は100%、有効回答数は241（男80，女161）であった。

施設の介護職員については、Ｉ県内における105名の介護職員を対象に、自計式・郵送調査を行った。回収率は、73.3%、有効回答数は77（男30，女47）であった。

調査対象の構成別平均年齢は、表１のとおりである。

表１　構成別平均年齢（歳）

	全調査対象者		
	男性	女性	全体
平均年齢	24.45	24.94	24.19
標準偏差	10.20	9.69	10.48
	学　　生		
	男性	女性	全体
平均年齢	20.36	21.49	19.79
標準偏差	3.69	4.68	2.94
	介 護 職 員		
	男性	女性	全体
平均年齢	37.14	34.00	39.15
標準偏差	13.16	13.17	12.88

なお、質問紙の項目内容は、介護実習生と施設介護職員では、若干異なっているが、本論文では、共通して実施した質問項目を中心に報告する。ただし、介護者の業務における性別役割分業意識についての分析は、施設介護職員に対してのみの質問項目から行なっている。

調査実施時期は、介護実習生2000年７月～2001年１月、介護職員2002年４月である。

3 調査結果

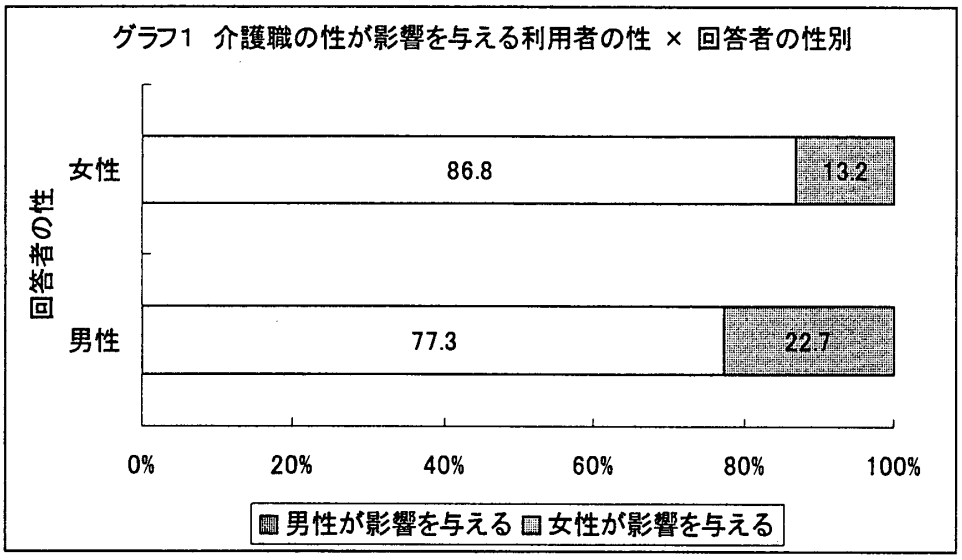
(1) 介護職の性が利用者に与える影響

介護職の性が利用者に与える影響についての有無を質問した。その結果、「ある」63.8%、「ない」36.2%となり、６割以上が介護職の性が利用者に影響を与えていると認識していた（df＝１、χ^2＝1.0722、ｐ＝n.s）。

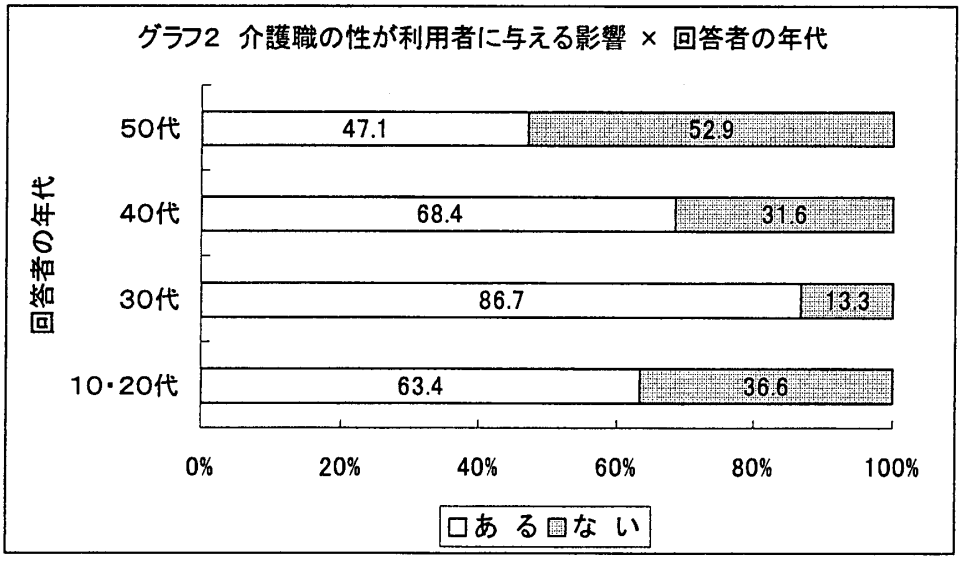
さらに、影響が「ある」と答えた人に対して、どちらの性が利用者に対してより影響を与えるかという質問を行なった。男性介護者の性が利用者に対してより影響を与えると考えているのが83.7%、女性介護者の性が利用者に対してより影響を与えていると考えているのが16.3%であり、約８割が男性介護者の性が利用者に影響を与えると認識していた。

これについて、性別によるクロス度数分析を行なった結果がグラフ１である。それによると、男性のうち、男性の性がより影響を与えるとしたものは、77.3%、女性のうち、男性の性がより

影響を与えるとしたものは86.8%であった。女性の方が男性介護職の性の影響をやや多く認識している。（df＝１、χ^2＝2.9292、p＜0.10）



次に年齢を年代でカテゴリー化し、独立変数としてクロス度数分析したのがグラフ２である。10･20代～40代では介護職の性が利用者に与える影響の「ある」が「ない」の２倍前後になっているが、50代以上ではほぼ同じである。



この傾向の違いは、今回の調査ではその要因を特定できないが、利用者との年齢差が50代以上では親子程度に近づいたことによること、影響があるとしても介護職の性別だけでない要因を認識していることなどが背景にあると考えられる。この点について、家庭内介護の研究における春日の次の考察は理解の一助となろう。「母親が健在なとき、『母親』の身体性は、無性的なもの、性別非関与的なものと…(中略)…観念されている。それは母親を強調し母親を聖別化する文脈で作られてきた身体観である。しかし、介護によって…(中略)…直面させられるのは、母親が女性

の身体を持った存在であるという事実である。さらに、年をとることは『枯れていく』ことだという加齢と身体性についての一般通念も老人の身体を無性的なものとみなす観念につながっていて、それと現実のギャップも大きい。…（略）」

このことから、年齢的には親子ほどの間である介護者、あるいは生活者というより身体性としての老いの終焉を日常的に見続けてきた介護者にとって、利用者を無性化したサービスの受益者と見てしまう危険性があることを自戒せねばならないであろう。同時に深い羞恥心を表明する人に出会ったとき、性に配慮した介護が求められていることを知り、高齢者の性の権利を実感していくことになるのであろう。

これは、介護のみならず、女性のもつ性役割態度の世代差の特徴とも関連している。つまり、人が自己を取り巻く環境を認知する性に関する認知的枠組みを性差観というが、この性差観は、女性では世代差が大きいといわれている。20～40代では有意差は見られないが、50代になると性差を大きく認知しているという。（伊藤）年齢が上がるほど伝統的な性役割態度を持つというのである。つまり、「介護は女性が担うことが望ましい」という観念が自明のこととして存在しており、男性が関与することについては、それ自体の現実性の低さを前提としているのである。

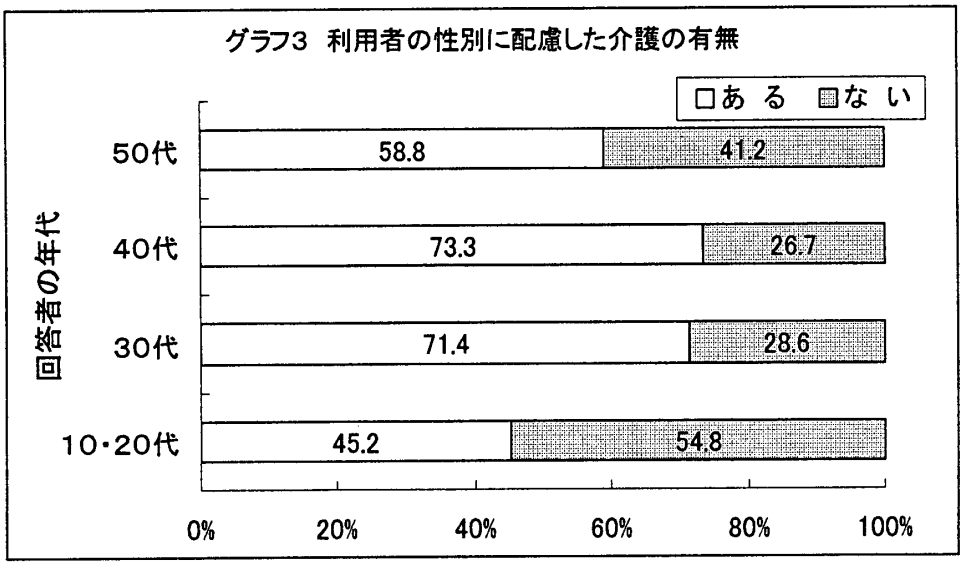
また、男性では30代以下と40代以上の世代に開きがみられ、40・50代で性差を大きく認知しているという。女性の世代差と1世代もずれているのである。男性が女性に伝統的な性役割を期待するのは、社会における40代以降の占める割合においても、その多さがうかがえよう。

こうしてみると、一般的傾向として40代から50代以降の介護者も利用者も、介護は女性の役割として伝統的に位置づけられていることにとらわれがちであるといえる。そこに利用者の高齢化に伴う無性化が、介護者の中に生まれているとしたら、高齢利用者の性にかかわる権利は、介護という実践の中で、後回しにされてしまうこともありうるのではないだろうか。また、高齢な利用者にとっても「介護者は女性」ということを当たり前なこととして受けとめているならば、女性利用者の性にかかわらず、男性利用者も、男性介護者に対する拒否感が生じたとしても不思議ではないと思われる。これについては、高齢化や障害による疎外感や劣等感を軽減させようとする認知的メカニズムが働いて、女性介護が求められるという考察もある。この認知には個人というよりは長い歴史のなかで、社会において弱者の直接的世話を女性が担ってきたこと、介護という働きそのものが価値ある働きとしての社会的認知を得ていなかったことなどが背景にあるという。それゆえに、利用者自身が優位性を保つために「より低いもの＝女性＝介護」という構造を崩しきれず、男性の行なう領域ではないかのように受けとめられてきた。結果、男性介護者の社会的承認や、個人的な受け容れにまだ消極的であるということになる。問題は単純ではないようである。

さて、現代の介護者の実態では、10～20代の「介護者の性の影響がある」が占める比率は高く、６割を超えている。10･20代の介護職に占める割合の増加や男性介護者の増加傾向から、介護する側がその性をより意識していくことになることをうかがわせているといえよう。では、実際に利用者の性別に配慮した介護が、どのように実践されているのであろうか。

(2) 利用者の性別に配慮した介護

現在の介護業務において利用者の性別によって分担や配慮及び制限をしている介護があるかどうか質問した。利用者の性別に配慮した介護の「ある」は58.4%,「ない」は41.6%であり、年齢を年代でカテゴリー化し、独立変数とし分析してみたのがグラフ３である。「ない」では10･20代が54.8%（相関比0.1362）であった。世代間での有意な差は見られなかった。



しかし、前述の介護者の性が利用者に与える影響について、10･20代では、影響があると認識していた比率が６割を超えていた。このことから、10・20代の介護者では、多くの比率で影響の認識をしているものの､現実では対応しきれていないことが推察される。

さらに、利用者の性別に配慮した介護の「ある」の中央値が36.0歳、「ない」の中央値が28.5歳であった。「ある」と「ない」では、年代を軸とした場合、その分布の中心年齢に差があり、「ない」方が7.5歳若い年齢に中心があることになる。具体的に利用者の性別に配慮した介護を30代半ばごろを中心として実践しているといえ、20代後半では「ない」が中心であるということになる。

また、30代､40代､50以上の利用者の性別に配慮した介護の「ある」が「ない」より高いのに対して10･20代が低いことから、10･20代の性差についての意識と実際の行動とのずれがうかがえる。影響を感じても、行動に移せない10･20代の介護者の現実が浮き彫りにされているともいえる。

性別比較では男53.3%,女61.7%であり（χ^2＝0.528､df＝1､p＝n.s）大きな差はなかった。

このほかに、介護職の性別に配慮した介護の有無、実習生の性別に配慮した介護の有無を質問したが、比率の傾向は類似したものだった。

(3) 性別に配慮した介護の種類

では、どのような介護の種類に配慮や制限などがあるのであろうか。その介護の種類について質問したのが、表２、表３、表４である。

表２　利用者の性別に配慮した介護の種類

カテゴリー	%
食事介助	0
入浴介助	88.9
排泄介助	86.7
移動介助	0
移乗介助	0
移動介助	2.2
清　掃	0
その他	4.4

表３　介護職の性別に配慮した介護の種類

カテゴリー	%
食事介助	0
入浴介助	71.4
排泄介助	77.1
移動介助	5.7
移乗介助	2.9
移動介助	17.1
清　掃	5.7
その他	8.6

表４　実習生の性別に配慮した介護の種類

カテゴリー	%
食事介助	0
入浴介助	85.7
排泄介助	96.4
移動介助	3.6
移乗介助	10.7
移動介助	3.6
清　掃	0
その他	0

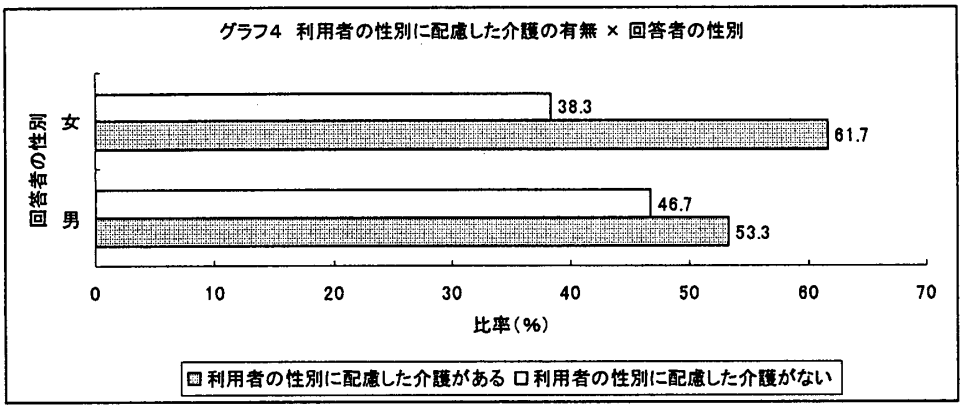
利用者、介護職、実習生のそれぞれの性に配慮した介護については、身体性にかかわる介助が高い比率をしめ、配慮される対象となっている。

ただ、介護職の性別を配慮した介護の種類では、「移動介助」が17.1%となっており、利用者と実習生の性別を配慮した場合の５倍から８倍の高い比率となっており、その差を顕著なものとしている。理由については質問していないが、介護者の身体性としての体力及び安定性が要因としてあり、介護者の負担の現れとも推察される。

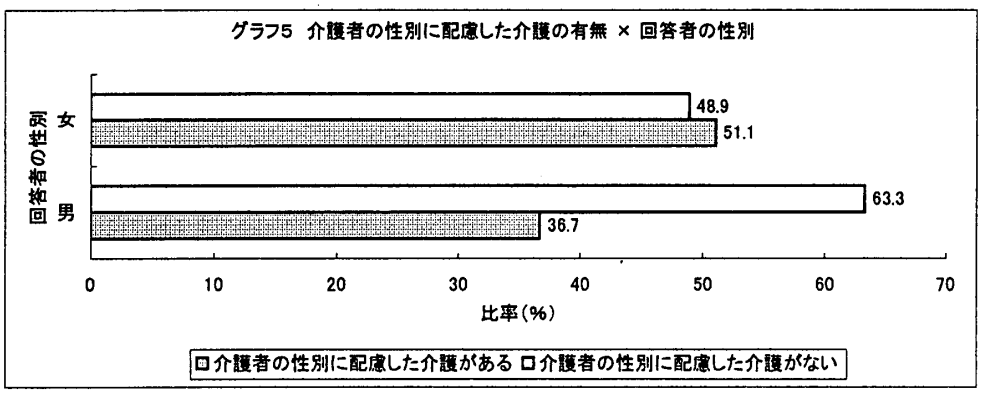
また、実習生では「移乗介助」が10.7%となっており、利用者と介護職員の５倍から10倍の高い比率を示している。この理由についても質問していないが、実習生の移乗介助には利用者の安全性の確保がその要因として考えられ、養成段階にある学生の移乗介助をはじめとする利用者の立場の安全確保に対して、その技術の未熟さが影響していると推察される。今後の養成の課題でもあろう。

性別に配慮した介護の有無の、男女の中での有無の比率をそれぞれ見てみるとグラフ４、５、６のようになった。男女では、どの性についての配慮がどのように強調されているのかというと、実習生の男性に実習生自身の性別に配慮した介護が「ある」としたものが、8割以上見られた。前述の10・20代に相当するものである。

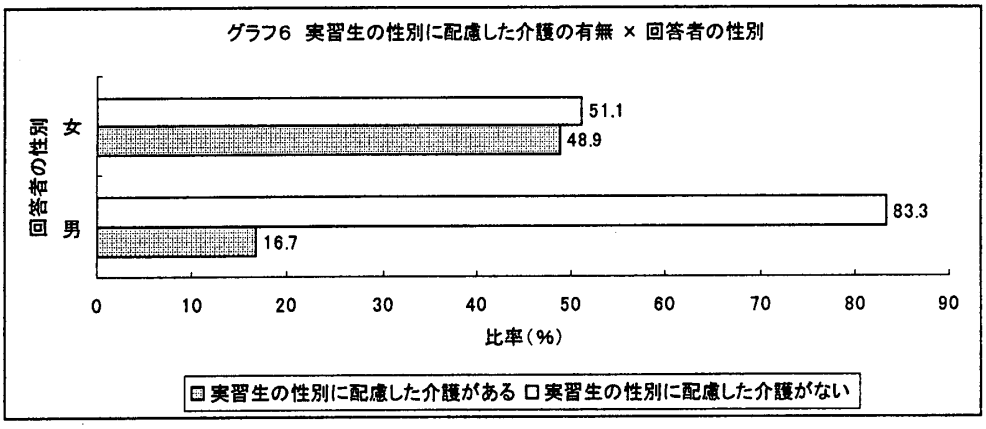
認識が高くても配慮の有無では低く、認識と行動のズレをうかがわせていたが、男性実習生にとっては、かなりの率で配慮していたことになる。先ほどの介護の種類から見ても、実習生では入浴介助、排泄介助が高い比率であった。この介助で、利用者と自分の身体性と性の関連性が高くなることを推察させるものである。



（χ^2=0.528、df=１、p=n.s.）



（χ^2=1.5309、df=1、p=n.s.）



（χ^2=8.2402、df=1、p<0.005）

(4) よい影響を与える介護、悪い影響を与える介護

つぎに複数回答で、よい影響を与える介護の種類と悪い影響を与える介護の種類について選択してもらった。その結果を利用者・介護職員・実習生の性に配慮した介護の有無とそれぞれクロス度数分析をした結果が、表５、表６である。

表５　性差が良い影響を与える介護内容（%）

	利用者の性に配慮した介護有	介護職員の性に配慮した介護有	実習生の性に配慮した介護有
食事介助	58.3	66.7	91.7
入浴介助	85.7	64.3	57.1
排泄介助	92.3	61.5	61.5
移動介助	50.0	50.0	62.5
移　乗	60.0	60.0	64.0
清　掃	50.0	25.0	75.0
移　送	64.7	58.8	52.9

表６　性差が悪い影響を与える介護内容（%）

	利用者の性に配慮した介護有	介護職員の性に配慮した介護有	実習生の性に配慮した介護有
食事介助	20.1	0	0
入浴介助	0	71.0	58.1
排泄介助	64.5	67.6	61.8
移動介助	64.7	50.0	50.0
移　乗	50.0	100	100
清　掃	100	0	0
移　送	0	0	0

様々なことが読み取れるが、入浴介助に関しては、利用者の性に配慮して、悪い影響を与えないということは、かなりの身体性を配慮して実践されていることの表れといえよう。

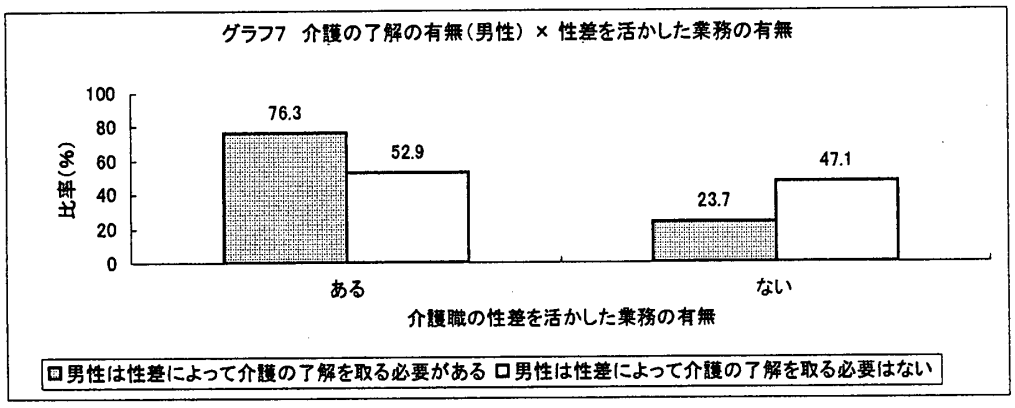
移乗介助では、悪い影響を与えるものに、介護職員と実習生の性を配慮した場合は100%となり、利用者のそれは50%となっている。移乗という介助が身体的接触や場合によっては身体の露出を伴っている際にも実施せざるを得ない場合などもあることから、どちらを優先させるかというときに、両者の安全性のほうを優先せざるを得ないというジレンマをうかがわせるものである。

移送については、それぞれの性に配慮する中において、悪い影響はなく、よい影響が現れているといえる。

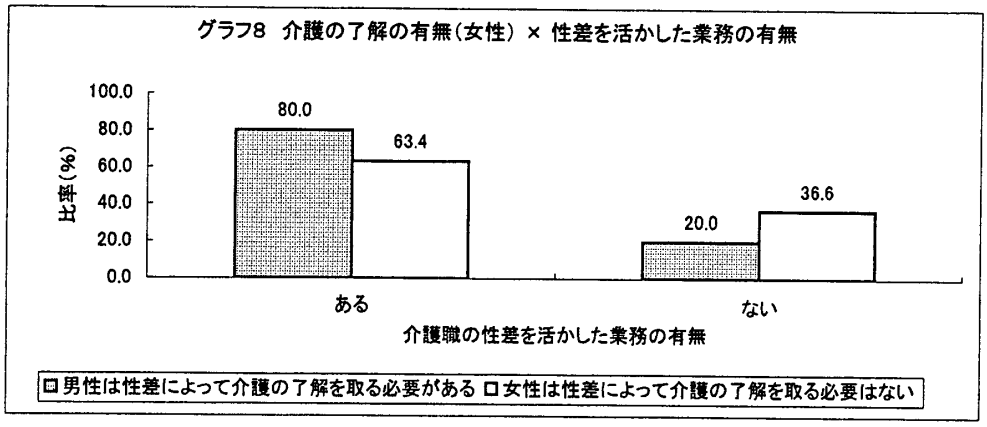
(5) 介護の了解

介護の実践を行う上で、介護者主導の介助ではなく、利用者の意向を確かめながら行なう介助は大切なものとなっている。利用者の主体性を尊重するという態度を、わかりやすく伝えうるところでもある。冒頭にも述べたが、利用者にとっての満足行くサービスには、サービスをどのような気持ちで受けとめることができたのかという点がないがしろにされてはありえない。サービスの量だけでなく、情緒的な支えや質が大きく影響するのである。そこで、この介護時の了解を得るという行為を一つの指標にし、性差を活かした業務とクロスして、分析を行なった。この結果が、男性介護者についてはグラフ７である。女性介護者についてはグラフ８である。

男性も女性も性差を活かした介護業務を「ある」と答えた場合は、介護の了解についても高い認識を示している。一人ひとりの介護実践での実現を大いに期待したいところであるし、10・20代が介護職員の約３割を占める今日、思っていてもできないことのない実践をめざして、心がけてほしいところである。



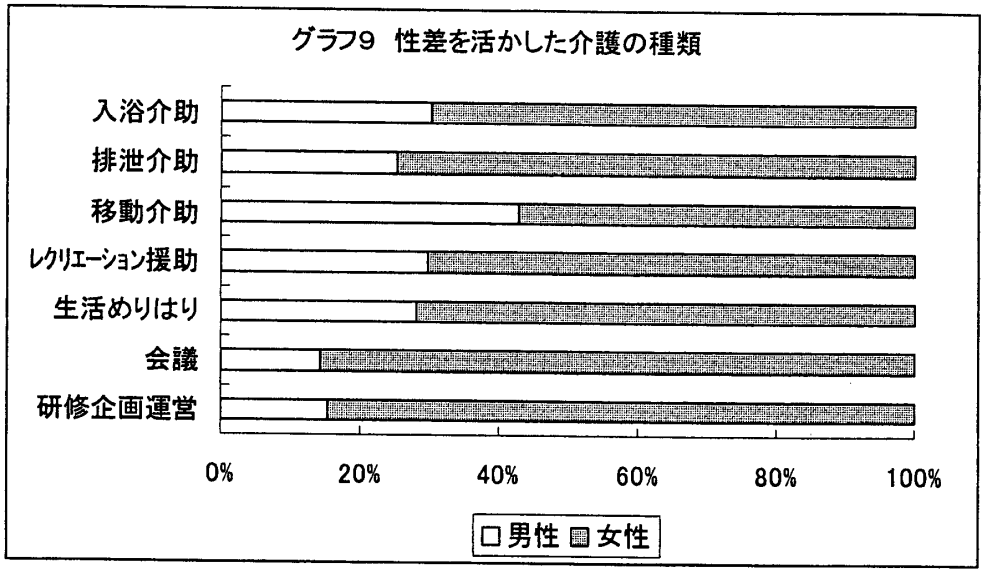
(χ^2=3.4924、df=１、p<0.10)



（χ^2=2.5252、df=１、ｐ=n.s.）

(6) 性差を活かした介護の職務

介護職の性差を活かした役割や職務について差異の顕著なものについてまとめてみると、グラフ９のようになった。介護者が性差による役割期待を反映した業務として選んだものには、本来の介護業務以外のものが多かった。これは多様に膨れ上がる職務の範囲と種類の多さが反映しているといえる。



第Ⅲ章　まとめにかえて

介護の特性として、その身体性と心理･感情の重視が挙げられる。それには性別のみならず人柄や性差観、具体的介護内容、前後の生活のありようなどが複雑に絡み合っている。特に接触や露出を伴うため、恥ずかしさや嫌悪感、拒否感といった感覚が、利用者にとって満足のいく望ましい介護の質に大きく影響しているといえる。今回の調査では、介護者については、利用者の異性介護を意識するものは低い割合であった。伊藤の研究によれば、女性のほうが男性に介護されることへの抵抗感が高く、年齢が高くなればなるほど男性に介護してもらいたくない傾向であるとい

う。また施設における85歳以上の利用者のしめる割合が増加する中で、依然として多くの利用者の性役割固定観念は伝統的であり、性差を個人に還元するまでにはいたっていないことを認識しなければならない。

男性介護者の増加と10･20歳代が多く占めることにより、介護者と利用者との世代による性差観の違いには隔たりがある。平等意識が今日の時代性を反映していて優先されるのでなく、介護は利用者にとって望ましいものであるべきことが前提なのである。

今回の考察は調査の一部を分析したにとどまった。まだ先にある家政学的な見地にも言及しきれていないことも心残りである。

また、今回の調査には、大変お忙しい中、この調査のために時間を割き、ご協力いただきました施設の関係の皆様、また実習後のアンケートに快く協力してくれた多くの学生に、紙面を借りてではございますが、感謝申し上げます。今後、更なる介護の質の向上や介護労働をともに考えるヒントになればと考え、ここに報告させていただきました。ありがとうございました。

参考文献

伊藤　祐子　「成人の性差観が性役割選択に及ぼす影響」『心理学研究』第71巻第１号 2000

岩脇　三良　「ジェンダー役割固定観念と社会科における性差」
『昭和女子大学女性文化研究所紀要』第15号 1995

春日キスヨ　『介護とジェンダー　男が看とる女が看とる』家族社 1997

春日キスヨ　『介護問題の社会学』岩波書店 2001